

「高齢者に優しい街とは」

一宮市立西成中学校一年

岡田 槻乃

「見えにくい！聞こえにくい！動きにくい！」

これは、高齢者疑似体験を通して私を感じたことです。

私達は学校で、福祉実践教室を行いました。私は、その中で、高齢者疑似体験というものに参加しました。なぜ、この体験を選んだかというと、私には祖父母だけでなく、九十三歳になる曾祖母もいるので、高齢者疑似体験を通じて祖父母や曾祖母の普段の生活の中で、どんな事が大変なのか少しでも理解できるかなと思ったからです。

体験では、高齢者の視覚を体験するためのゴーグル、聴覚を体験するためのヘッドホン、体や手先の動きにくさを体験するための重りや軍手をつけて、段差を上ったり、新聞を読んだり、財布から言われた金額の小銭を出したりしました。

その時の感想が、「見えにくい！聞こえにくい！動きにくい！」だったのです。

新聞は大きい字しか読めず、声は近くの人の声しか聞こえず、段差は上りにくいし、小銭に関しては、何円玉なのかもよく分からない上に取り出しにくく、これだけのことをしただけで、どっと疲れてしまいました。曾祖母は、いつも動作がのんびりでしたが、その理由が分かった気がしました。そして、これからは、祖父母や曾祖母だけでなく、周りで



困っている高齢者の方がいたら、進んで手を差し伸べようとも思いました。

曾祖母は動作がのんびりではありませんが、私の自慢の曾祖母です。とにかく手先が私以上に器用で、編み物、手まり作り、洋服作り、着物の着付け等、本当に多才な人です。曾祖母は小牧市に一人で暮らしています。九十三歳という年齢で、耳は遠くなってしまったものとても元気で、自転車で買い物に出かけたり、お友達とカラオケ喫茶に行ったり自由気ままな生活をしていました。

ところが数ヶ月前のある日、曾祖母は、朝起きたら左のひざに全く力が入らなくなっていたのです。病院に行っても年齢的なものだと言われ、これといった原因は分からなかったそうです。その前日まで元気に自転車で動き回っていたので、とてもショックだったと思います。それから、一人で買い物も行けず、家の中でも杖について生活するようになってしまいました。

体が不自由になってしまったため、祖母が曾祖母に、小牧市の家を出て一宮市で一緒に暮らそうと提案しましたが、やはり何十年と住み慣れた場所を離れるのは嫌らしく、このまま一人で生活する事を選んだそうです。今は、週に一度、デイサービスに通い、入浴やリハビリをしています。私は先日、母と祖母と一緒に曾祖母の様子を見に行きました。普段は一人で買い物に行けないので、一緒に近所のスーパーに買い物に行きました。お店までは、高齢者用の電動カートに乗って行きました。普通に歩けば五分くらいで着く距離ですが、カートの速度はゆっくりなので、倍くらいの時間がかかりました。また、横断歩道で曲がってくる車も、長い時間車に待ってもらい、何だか申し訳ない気持ちになりました。曾祖母はことあるごとに、「悪いねえ」「悪いねえ。」と言っていました。私を感じている以上に、曾祖母は申し訳ない気持ちでいるんだなあと、思っ少しかわいそうになりました。

お店に着くと、まず、カートを自転車置き場にとめました。他の自転車の邪魔にならないようにどこにとめるかだけでも曾祖母はとても気を遣っていました。「ここならこの自転車は出れるよね。」と確認しながら駐車をしました。

カートをとめると、私はお店の買い物カートを曾祖母の所まで持って行きました。曾祖母は、杖の代わりに買い物カートを押しながらゆっくり買い物をしました。気軽に買い物に行けないため、なるべく日持ちする商品を選んで買い物をしていました。私が普段買い物をする時には、その時に欲しい物だけ、消費期限も大して気にせずに購入しているのに、こんなことまで気にしなければならぬのかと気づかされました。

私は、この経験を通して、高齢者の方の気持ちが少し分かった気がしました。高齢者の方は、人になるべく迷惑をかけないように、気を遣いながら生活していると思います。そんな気持ちを私達若者が感じ取って、少しくらい歩くのが遅くてもあたたかい目で見守ってあげる、困っている方を見つけたらためらわずに声をかけてみるのが大切だと思います。ほんの少しの優しい気持ちを一人一人が持ち、高齢者の方をもっと暮らしやすい街にしていきたいと思いました。

